

《シンポジウム IV》

各種画像診断における核医学の役割

司会のことば

渡 辺 克 司 (宮崎医科大学放射線科)

石 井 靖 (福井医科大学放射線科)

各種画像診断が花盛りとなって、すでに 20 年の歴史を経た。現在までに、それぞれのモダリティは自己の世界の無限の完結を目指す、いわば、帝国主義の時代にあったと言ってよい。しかしながら、ここにきて他のモダリティの発展も見聞きした上で、総じて医療の中でどのように役に立つかの位置づけを行う、いわば、協調の精神に立ったアイデンティティの確立が必要になってきたと思われる。研究の権化と思われる PET ですら clinical PET を呼称する時代である。

治療は今後どんどん非侵襲的な方向に推進されて行くものと思われる。それを支えるのは同様に非侵襲的な画像診断であろう。その中であって、核医学の特徴はといえば、それは定量的で、機能の描出に優れているということである。そうであ

れば、形態局在診断に加えて、核医学による定量的機能評価は、適切な治療法の選択とその効果の判定に必須であると思われる。また機能変化は形態変化に先行するといわれているが、そうであれば病気の早期発見、健康の保全、成長、老化のモニターに有用であると思われる。

いずれにせよ、本シンポジウムは、このような観点にたつて、それぞれの核医学領域のエキスパートの先生方に議論していただくこととした。加えて、核医学の得意とする役割に迫られる他のモダリティの現状についても、それぞれ特別発言をいただくこととした。この機会に唯我独尊の核医学から、協調の精神にたつて、貴重な医療資源の有効な活用に役立つ核医学の視点が得られたら幸いと思う次第である。

1. 中 枢 神 経 領 域

陣之内 正 史 (宮崎医科大学放射線科)

脳の核医学検査は、脳循環動態および局所脳機能の測定と、脳脊髄液循環の評価に分けられる。一般臨床においては、SPECT を用いた脳血流の測定が最も利用されている。

(1) 脳血管障害

$^{123}\text{I-IMP}$, $^{99\text{m}}\text{Tc-HMPAO}$ が現在利用できる脳血流トレーサーである。当初、脳梗塞発症早期に虚血の診断が可能と期待されたが、実際の臨床の場では、相当する神経症状を有して X 線 CT で

出血がなければ脳梗塞と診断されて治療されることが多く、早期診断の意義は少ない。しかし、CT にて異常を検出し得ない TIA, RIND 等の脳虚血病巣の検出、範囲、程度を把握できる点は評価でき、今後脳虚血疾患に対する intervention が普及するとその診断的意義は高まるとと思われる。また、基底核、深部白質領域に小梗塞のみられる慢性期脳虚血において、主幹動脈に原因があるかどうかの推定にも有用で、ダイアモックス負荷に